



神奈川県立図書館北側ファサード。ブリーズ・ソレイユの下部細部。柱が浮いているように見える(写真/吉田銅市)

横浜の戦後建築

公益社団法人横浜歴史資産調査会
副会長 吉田銅市

戦後に建てられた建物が初めて国の重要文化財に指定されたのは2006年のことで、その後もこの動きは徐々に進み、鎌倉の旧・神奈川県立近代美術館(1951年)も2020年に重要文化財に指定された。竣工後50年を経た建物は指定あるいは登録の対象となるという一応の方針に基づけば、戦後もすでに75年以上も経っているから対象となるものはたくさんある。それに、1973年竣工のシドニーのオペラハウスは早々と2007年に世界遺産になっているから、建設年度もそれほど重要視することもないかもしれない。

横浜の戦後建築は、日本の戦後建築を先導したところもある。前川国男の事務所による紅葉ヶ丘の県立図書館・音楽堂(1954年、県指定重要文化財)がその先駆けで、周辺には県立青少年センター(1962年)、神奈川婦人会館(1965年)、県立青少年会館(1966年、2009年解体)が同じ事務所によって次々に建てられ、紅葉ヶ丘は「前川ワールド」となるに至った。

もう一人の戦後建築の先導者で、上述の旧・神奈川県立近代美術館の設計者、坂倉準三も横浜に大きく関わっている。シルクセンター(1959年)と県庁新庁舎(1966年)である。その

他、リスト本社ビル(1953年、山下寿郎)、横浜市庁舎(1959年、村野・森建築事務所)、明倫学園円形校舎(1959年、坂本鹿名夫)、社会保険横浜中央病院(1960年、山田守)、マリンタワー(1961年、清水建設)、都橋商店街(1964年、創和設計)などが戦後建築の主だったものだが、近頃は防火帯建築も注目され調査されている。戦後の都心の住居景観の原形を形づくっているからである。

これらは横浜の歴史を語る貴重な生き証人であるが、その保存活用はなかなか難しい。戦後の建物は特段の先駆性・特異性もない言ってみればごく普通の建物であるから、貧しい時代の必要に應えただけの古くみすばらしいものに見えてしまう。現に、横浜文化体育館(1962年、久米設計)も神奈川県警察本部尾上町分庁舎も最近解体された。

しかし、戦後建築については全体的な詳しい調査もまだ行われておらず、ひっそりたたずんでいるものもあるかもしれない。街は「各々の世代が一頁ずつ書き加へた本である」(アナトール・フランス)からして、どの頁も空白であってはならないのである。

横浜の戦後建築の嚆矢『防火帯建築』

(株)山手総合計画研究所
会長 菅 孝能

横浜都心部は空襲と敗戦後の米軍の長期接収により、都心部の接収解除が始まる1952(昭和27)年まで復興は他都市から大きく遅れた。このような事情から横浜市建築局長内藤亮一を中心に、都市の不燃化と接収解除地の早期復興を目的に、道路と宅地の原形復旧と合わせ、都心部への人口誘致と都心経済活動の回復を目指して、国の耐火建築促進法を使い、宅地の共同化による防火建築帯を密に面的に造成する方針が決定された。その構想は幅8m以上の道路沿いに防火建築帯を指定し、ほぼ100m四方の防火建築帯に囲まれた中庭を持つ生活街区を形成するものであった。また、防火建築帯事業は民間事業であるため、その支援のために、国の補助金に加え、市は(財)建築助成公社を設立し独自の融資制度を設けると共に、神奈川県住宅公社が横浜市と協力して、民間ビルの上に公社の賃貸住宅を載せて建設する「併存ビル」方式で民間の工事費負担を軽減し、共同化と住宅供給を促進した。計画は総延長37kmに及ぶ都心部全体を網羅する面的計画であった点に大きな特徴がある。通り沿いに店舗等が並び、上階に事務所や住宅を積層して多様な用途が立体的に共存する世界共通の街並み型都市建築であり、高さや壁面線を揃えながらそれぞれのデザインが展開されて街並み景観を形成する事になった。しかし防火建築帯の全てが実現には至らず、単体も多く、いつしか防火帯建築と呼ばれるようになった。今も150棟程が現存しているようだ。その中から、都心部のまちづくりに取り組んでいるものを紹介したい。

● 弁三ビル 1954(昭和29)年築

関内弁天通り3丁目に建ち、間口75mの長さでブロックの大半の街並みを形成している。原三溪の次男原良三郎が事業主で戦後復興の初期に県住宅公社併存ビル第1号となった防火帯建築の記念碑的建築である。1、2階は店舗付住宅、3、4階が県公社のアパートで、その後多く建てられた併存ビルの典型である。弁天通り側に配置された3、4階アパートの共用廊下は幅が2m程と広くゆったりとして街との一体感を感じさせる魅力ある都市建築である。近年オーナーによるビル再生が行われてクリエイターたちの新しい入居も多い。隣接した県住宅公社ビルとは街区内で所有権の違う建物同士が動線やコモンスペースを連携していたが、残念な事に解体された。



弁天通り3丁目にある弁三ビル(原ビル)。左の写真右側が解体され再建中の県住宅公社ビル



吉田橋から大岡川にかかる都橋に向かう吉田町本通りの入口に建つ吉田町第一名店ビル

● 吉田町名店街ビル 1957(昭和32)年～1959(昭和34)年築

関外吉田町大通りに面して3ブロックを4棟のビルが200mに亘って街並みを形成しており、防火帯建築の理念を具現化したものとして重要である。1階は店舗、2階は店舗または事務所、3、4階が住宅という構成で、ヒューマンスケールのスカイラインとリズムカルなファサードが連なる街並みは背の高い並木と相まって魅力ある景観をつくっている。以前からあった画廊やバーなどに加え、クリエイターのスタジオ、ブックカフェ、カフェダイニング、アートショップなどが立地し、さらに吉田町名店商会主催の「アート&JAZZフェスティバル」「まちじゅうピアガーデン」などが定期的に開催され、クリエイターや若い人達の関心を集めている。

● 泰生ビル 1967(昭和42)年築

融資を受けた防火帯建築ではないが、関内桜通りの中程の隣り合う敷地を一体利用した5階建ての共同ビルである。中古ビルの空室化はまちづくりの課題だが、市の「芸術不動産事業」の「リノベーション助成」を受け、「さくらWORKS 関内」という会員制コワーキングスペースの開設により、人の輪が広がり、若いクリエイターやデザイナー、コミュニティビジネスの個性ある内装セルフビルドによる入居が相次ぎ、ビル経営が大きく改善した。現在は一方のビルオーナーの所有室も買い取り、通り向かいの小さな空きビルもアネックス「泰生ポーチ」として再生した。こうして桜通り周辺では、新井ビル再生や「桜通パークフェス」などの通りの活用や魅力づくりに発展した。



少し遅めに濃いピンクで満開になる八重桜の関内桜通りに面している泰生ビル。ヨコハマヘリテージもこのビルの中に事務所がある

近代横浜の陶磁器産業

横浜港からの輸出陶磁器を手がけた

井上良斎と宮川香山

神奈川県立博物館 学芸部 佐藤登美子

井上良斎は初代、二代、三代と続く陶芸家の家系である。初代は瀬戸の生まれで、幕末に江戸に出て御庭焼に従事した後、浅草の橋場に窯を築き、「隅田焼」というデコラティブな輸出陶磁器の生産に従事した。二代良斎は初代の養子で、国内外の博覧会に出品し、優美な釉下彩の作品で世に名を知られている。三代良斎も若い頃は隅田焼を手伝ったが、大正時代に窯を浅草から横浜に移し、以後終生横浜の地で活動した。板谷波山に師事し、昭和に入ってから、「東陶会」の立ちあげに加わり、帝展での出品と入賞を重ね、関東を中心とした陶芸界で重きを成していった。また、妻キンが表千家茶道を教えていたことから、茶陶でも精力的に仕事を残し、茶入や水指などの作品が知られている。「祖父は職人的な仕事もしてきたのです」と川井さんはおっしゃるが、職人的な面も含めて、三人の井上良斎の仕事をたどることは、近代、特に東京周辺の陶磁史と軌を一にする。

今は多くの人が知るところとなったが、横浜の陶磁器生産は、井上良斎だけではない。最も有名なのは良斎の窯場からほど近い、南太田に工房を構えた宮川香山だ。初代宮川香山（眞葛焼）は、もとは京焼の陶工として名をはせ、輸出を目的に明治初年に横浜へ移り、立体的な造形を陶磁器の表面に組み合わせる「高浮雕」の作風で人気に火がついた。

横浜の中心地には輸出向けの工芸品を扱う店舗が数多く居を構えていた。まだ日本の産業が近代化する前は、日本の精密な技術と卓越した意匠を駆使した工芸品は、欧米社会で高い人気を持っていたことから、重要な輸出品目となっていたのだ。そして、海外の人々の好みや生活環境に即したデザインを形にするには、横浜に商店を構え、現地で職人を抱えることが、好都合だった。もちろん、横浜には窯業の伝統は無いし、焼き物に適した土を産するわけでもない。そこで横浜の陶器商達は、焼きあがった白い素地を美濃や九谷から取り寄せ、絵付けだけを横浜の地で行っていたのだ。絵の心得のある職工は、この時期各地から横浜を目指してやってきた。彼らは、自らをただの職工とは思っていなかった。単なる文様ではなく、素晴らしい絵画を陶磁器の上に描くことにより、欧米に日本の優れた文化を知らしめ、国際社会における日本の地位向上を目指す、そのような役割が自分たちに課せられている、と大真面目に思っていたのだ。当時の輸出陶磁器を見ても、その自意識の高さが伺える。できるだけ細密に、美しく、日本の花鳥風月を、伝統を、女性を、描こうとする熱が伝わってくる。良斎も輸出陶磁器を手がけていたことから、このような横浜の陶磁器をめぐる環境が、自分の作陶にも適していると考え、この地を選んだものと思われる。

先日、横浜市南区に残る、井上良斎（三代）の窯場を拝見する機会があった。今となっては谷戸の自然は消え失せ、横浜の陶磁器産業も姿を消して久しい。しかし良斎の窯場は、近代横浜の陶磁器産業の歴史を伝える、唯一ともいえる貴重な遺構となっている。井上良斎研究は、まだ始まったばかりである。彼の事績を詳細にたどることは、新たな陶磁史の扉を開くであろうし、新たな横浜のアイデンティティを作り得る予感がしている。

戦前陶磁器輸出に使用された登り窯が横浜に現存している!! 陶芸家 井上良斎の窯場

登り窯と永田の自然を守る会 事務局 川井興一

藩主の後盾を失った明治期の陶芸界は、輸出に活路を見出しました。開港した横浜はその窓口として生糸、茶、絹織物、漆器、陶磁器などを輸出していました。横浜からの陶磁器輸出の歴史的意義について、横浜市史第三巻下では、「横浜の輸出総額に占める陶磁器輸出の割合は、第一のピークの明治14年でも2.7%にすぎない。しかし明治以降の



井上良斎作「結晶青磁耳付花瓶」
（所蔵／川井興一）



井上良斎作「線刻黄瀬戸釉花瓶」
（所蔵／川井興一）



崖二鷹大花瓶 一対のうち
（宮川香山眞葛ミュージアム保管 山本博士所蔵）



釉下彩黄菖蒲大花瓶

（宮川香山眞葛ミュージアム保管 山本博士所蔵）

■宮川香山 眞葛ミュージアム

横浜駅から徒歩8分、海に面したアート&デザインの街・ヨコハマポートサイドのロア参番館にある。世界に愛された眞葛焼作品がみられる。

- ・土曜日、日曜日のみの10:00～16:00 開館
（但し年末年始など 休館あり）
- ・お問合せは、045-534-6853（三陽物産）

陶磁器産業の発展が輸出に支えられてのみ可能であったことを考えると、横浜の陶磁器輸出のもつ意味は極めて重要であったといわなければならない」と総括しています。陶磁器輸出は、15年戦争が激化する昭和10年代後半まで行われていました。当時の中区（現中区・南区）には陶磁器生産窯業工場が多数存在し、大岡川を利用して横浜港へ陶磁器を運搬し輸出していました。その陶磁器を実際に焼成していた窯場・登り窯が唯一横浜市南区に現存しています。

窯場は、関東大震災直後に、多摩丘陵の南端の舌状台地の丘の中腹の傾斜地に三代井上良斎により造られました。初代は江戸時代末期に瀬戸から尾張藩の御用窯師として浅草・橋場に窯を築きましたが、御維

新後、輸出に活路を見出し、二代良斎まで浅草で作陶活動を行なっていました。三代良斎になり大正3年輸出に便利な横浜(現横浜駅東口辺り)に移窯し、大正12年に震災を受け、現在地に移りました。

三代井上良斎は、明治38年父二代良斎の逝去により17才で家督を継ぎ、田端で作陶していた板谷波山に師事して、陶芸の基本を学びました。当時の陶芸界は、従来の職人としての陶工から、個人としての陶芸作家への変革期でした。折しも大正デモクラシーの兆しが起こりつつある時期で、陶芸界では板谷波山が東陶会を組織し、陶芸作家として作品を発表することにより、今に繋がる陶芸界の流れを生み出しました。三代良斎は、当初から主要メンバーとして参加し、官展などで作品を発表しながら、家業の陶磁器窯業を営んでいました。戦後登り窯は使われなくなりましたが、陶芸作家として日展などで活動し、昭和28年第一回横浜文化賞受賞、昭和34年「丸文平皿」により日本芸術院賞受賞、昭和41年日本芸術院会員に推挙され、昭和43年神奈川県工芸会会長に就任し、昭和46年後継者を残さず、82才で逝去しました。

井上良斎窯場には、作業場・登り窯・旧宅など当時の施設・道具など一式が保存されており、平成17年に横浜市南区役所により登り窯覆い屋が建て替えられ、見学がしやすくなりました。また、今は開発で失われてしまった地域の往時の谷戸の自然が残っています。平成19年にはヨコハマ市民まち普請事業で、湧水を活用した水路・広場を整備し、地域の小学校の生徒達の校外学習の場として活用されています。

歴史の一時期永田から陶磁器により世界に情報を発信していた窯場・登り窯を保存し、窯場に残る谷戸の自然や場所を地域で活用しながら、子ども達の地域理解の糧としていこうと、平成12年地域の有志により「登り窯と永田の自然を守る会」が組織されました。自然観察・陶芸活動・地域の歴史研究・ホテル再生活動など窯場の多様な資産を活用して活動を行なっています。横浜の近代化産業遺産としての窯場・登り窯を保存していきたいと希望しています。

▼窯場・仕事場

▶登り窯



2022年10月14日 新橋-横浜鉄道開業150周年

連載 第5回

元横浜市港湾局港湾整備担当部長

北村圭一



横浜開港150周年をふり返って

今から遡ること10年、横浜は開港150周年を迎えました。横浜市では記念事業として4プロジェクトを設定、「式典・祝祭」「まちづくり推進」「地域力発揮」「人材育成」をその

切口としました。記念式典、イベント、文化芸術創造都市の形成、横浜サイエンスフロンティア高校の整備等は懐かしい思い出です。

まちづくり推進プロジェクトでは、かたちが残る「横浜の新しい顔づくり」として、象の鼻パークの整備、マリントワーと日本丸メモリアルパークのリニューアル、アメリカ山公園整備を行いました。

象の鼻パークの整備においては鉄道がつつが横浜の歴史と文化のつながりを強く意識しました。敷地内に明治44年に敷設された鉄道・横浜臨港線の廃線敷を活用した「臨港線プロムナード」を活かし、傾斜した芝生広場を設けました。これにより、みなとみらい地区の歩行動線とパークとの一体化が形成出来ました。また、整備中に広場予定地にあった「東西倉庫」を解体撤去したところ、跡地から円形の遺構が発見されました。横浜歴史資料調査会の米山さんに調査を依頼したところ、明治29年に税関と鉄棧橋(現大棧橋)を結ぶ荷役運搬用軌道と手押しトロッキを方向転換する為の小型転車台(ターントーブル)である事が判明。保存状態が大変良好で市民向けに現地見学会を開いたらどうかと薦められ、急きょ見学会を実施しました。評判を呼び、全国から2千人を超える来場者を見ました。歴史的遺構を保存展示する事が重要と考え、設計を変更して転車台4基と軌道一部を現地に保存展示しました。

鉄道開業150周年に向けて

鉄道開業150周年、コロナ禍でのイベント開催には課題多ですが、日本鉄道保存協会の総会・見学会が横浜で開催されるに合わせ、鉄道に関連する土木遺構を活かしたまちづくりを紹介する見学会や資料展示が出来ると良いですね。新横浜市民庁舎のアトリウムやみなとみらい線の駅構内空間を利用するのもよいのではないのでしょうか。



※ロゴ使用にあたっての詳細は、ホームページ上でご案内します。お問合せは事務局までお願いします。

〈ご寄付をくださったみなさま ありがとうございます〉

■歴史を生かしたまちづくりファンド(2022年2月末現在、敬称略)

氏名	寄付額
(株)三陽物産	1,000,000円
(株)すべ〜す百貨	100,000円
ユニオン映画(株)	100,000円
(株)テレバック	50,000円
網河 功	38,000円
NPO法人横浜ロケーションコーディネイト	100,000円
多田真太郎	30,000円
noi(株)	10,000円

氏名	寄付額
東映(株)東京撮影所・第一制作部	50,000円
(株)メディアミックス・ジャパン	50,000円
竹内宇哲	100,000円

■旧モーガン邸再建計画寄付
(2022年1月8日〜2月末現在、敬称略)

氏名	寄付額
木阪尚志	5,000円
庄司みづほ	5,000円
平川登貴子	10,000円

●「旧モーガン邸再建」のための寄付のお願い。

個人=5,000円(一口)

団体・企業等=100,000円(一口)

振込先: ゆうちょ銀行

口座番号: 00270-4-124271

加入者名: 公益社団法人 横浜歴史資産調査会

※恐縮ですが、旧モーガン邸と明記してください

■『ヨコハマヘリテイジスタイル 2022年春号』

■発行/2022年3月31日 公益社団法人横浜歴史資産調査会

■事務局/〒231-0012 横浜市中区相生町3-61 泰生ビル405

TEL・FAX/045-651-1730 E-MAIL/yh-info@yokohama-heritage.or.jp

ホームページ http://www.yokohama-heritage.or.jp